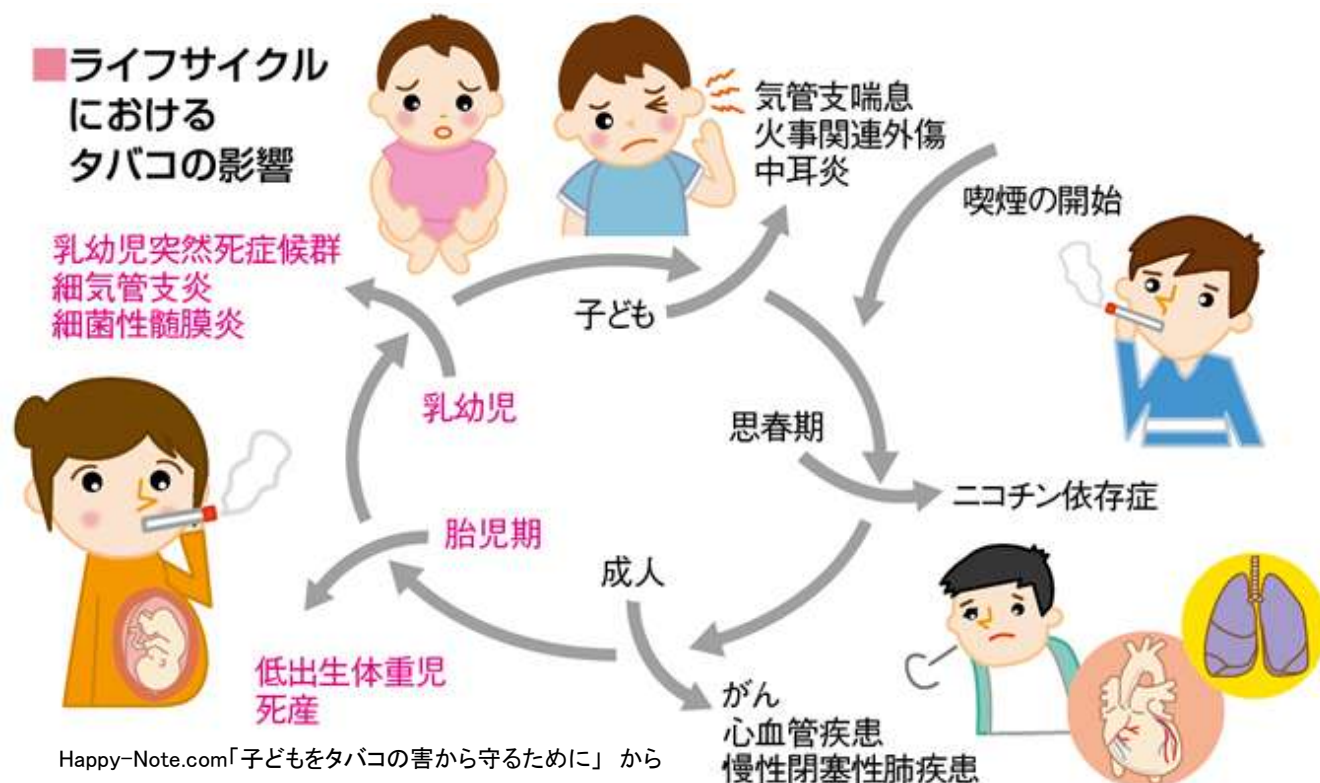


# 週刊 タバコの正体

「タバコは20歳になってから」というのは世間の常識ですが、だからと言ってタバコの影響は大人だけにあるわけではありません。図にあるように、妊婦の喫煙は胎児に影響し“低出生体重児”や“死産”の危険性が増します。そして大人たちのタバコの煙は“乳幼児突然死症候群”の大きな危険因子で、“細気管支炎”や“細菌性髄膜炎”の原因ともなります。乳幼児期を過ぎても“気管支喘息”や“<sup>ぜんそく</sup>中耳炎”の発症に影響します。



そして、思春期を迎える中学・高校時代に、喫煙する大人たちの影響を受け興味本位で喫煙を開始してしまうと、瞬く間に“ニコチン依存症”になってしまいます。皆さんのまわりにもそんな友達がいるかもしれません。一度ニコチン依存症になると、残念ながらすぐにタバコをやめることができません。それどころか一生吸い続けてしまう人も大勢いるので、“がん”だけではなく心臓や肺の病気に罹ってしまうわけです。

胎児や乳幼児の頃からタバコの影響を与えてしまうなんて、いかなるものでしょうか。そのうえ、そんな子供たちがタバコを吸い始めてしまうのは、すごくかわいそうです。さらに、その子供がタバコをやめられないまま大人になり、次世代の子供たちにタバコの手を引継いでしまう事になるなんて、本当にやるせない思いがします。

君たちには、こんな流れを食い止めて欲しいと願っています。

産業デザイン科 奥田 恭久